

隣保館報

福祉と人権のまちづくり

発行 伊勢崎市立隣保館
伊勢崎市山王町1422-1
TEL 0270-23-3461
FAX 0270-23-6487

本年もより多くの皆様に足を運んでいただけるよう安心安全に心がけ、人権啓発の拠点となる役割を果たせるよう職員一同努力してまいります。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。



【 人権問題セミナーのご案内 】

だれにとっても大切な、人権について学ぶ「人権問題セミナー」を開催します。どなたでもご参加いただけますので、ぜひ多くの皆様のご参加をお待ちしております。

【日時】2月25日(水) 午前10時～11時30分 隣保館 1階会議室

【内容】講演会 演題「日常生活に潜むマイクロアグレッション」

～悪気はなくても、相手を傷つけることがあります～

【講師】伊勢崎市人権啓発指導員 羽生田 新一 先生

【申込】参加を希望する方は、2月20日(金)までに隣保館へ(23-3461)

法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催

第43全国中学生人権作文コンテストから

内閣総理大臣賞 受賞作品 『悪口』

京都府 亀岡市立育親学園 8年 寺竹 瑠音(てらたけ るね) さん

悪口を言って人を傷つけてしまったことがある。その時の記憶がときどき顔を出して私の心をざわざわさせる。その日、遊ぶ約束をして集まった友達数人と夏休みの宿題の進捗状況や、最近ハマっている推しの話など、たわいのない話で盛り上がっていた。そのうち話題は部活動や学校の話へと移っていき一人の友達の話になった。私もたまたまその子のことで困っていることがあったのでつい話に乗ってしまった。始めのうちはただの相談会のような雰囲気だったのだが、その子のせいで困っていることや腹が立ったことなどを話すうちに、みんなの気持ちが昂ってしまったのだろう、話はどんどんエスカレートし、悪口に発展してしまった。私も、大して気になっていなかったことに対しても「わかるわかる。」と共感してしまっていた。

そのうちに、私たちの会話を聞いていた一人の子が、「やめようや。」と言って私たちを止めてくれた。その瞬間、何とも言えない気まずい空気が流れ、私はしばらく何も言えなかった。振り返ってみると、この時の私には盛り上がっていた空気を壊されたという不満の気持ちの方が強かったのではないかと思う。その後、私たちが言ってしまった悪口が本人の知るところとなり、深く傷つけてしまった。「ばれなければいい。」という考えのもと無責任な発言をし、それを共有することで生まれる連帯感。そんなゆがんだ仲間意識は実は「いじめ」なのだということにこの時

の私は気づいていなかった。

集団生活の中では、日々いろんなことがある。当然自分と合わないなど感じる人も出てくるし、考え方の違いや意見が行き違うこともある。そんな不満がつい悪口という形で出てしまうことは、正直誰にでもあるのではないかと思う。しかし、私たちが間違っていたのは、一人の子を「ねた」にして「悪口」という行為を楽しんでしまったこと。そして、もし自分が「悪口」を言われている側だったらという想像力が欠けていたことだ。本人のいないところでの中傷は「いじめ」だ。

私には、その場の空気に流されて深く考えずに行動してしまう弱いところがある。私自身、過去に冷たい言葉を吐かれて傷ついた経験があるのに、「悪口」を言う自分を止めることができなかった。あの時、相手の気持ちを考えなかったこと、そして、第三者が止めてくれなかったら「悪口」はもっとエスカレートしたかもしれない——そう考えると、自分の軽率な行動がますます許せなくなる。一度吐いてしまった言葉は二度と取り消すことはできない。深く反省し、友人にも謝罪をした。友人は、謝罪を受け入れてくれたが、友人との関係は元どおりというわけにはいかず、小さなしこりが残ったままだ。

「空気を読む」という言葉がある。その場の空気を敏感に察知してうまく行動することだ。反対に「空気が読めない」ことを揶揄する言葉「KY」という言葉も生まれた。ノリが悪かったり、場の盛り上がりに参加しなかったり、時には「正義」さえも茶化してしまう言葉だ。この言葉のせいにするつもりはないが、この「空気を読む」ということに私たちはものすごく敏感で、縛られているような気がする。「空気が読めない子と思われたくない。」そんなマイナスの感情が行動にも表れてしまっているように思うのだ。あの時、悪口を止めてくれた子は、あの瞬間、私たちの中では「KY」だった。「せっかく盛り上がっているのに自分だけいい子ぶって…。」と。けれど、陰口を止めてくれた子にとって「やめようや。」の一言がどれだけ勇気が必要とする行動だったのかということが今ならわかるし、素直にすごいと思う。今年の夏休みはパリオリンピックが開かれ多くの日本人選手の活躍が連日報じられた。一方で、負けた選手の言動に対して多くの誹謗中傷がSNS上に書き込まれるというマイナス面も取り上げられた。このニュースを聞いて、なぜ頑張った選手に対して嫌な言葉を浴びせるのか。匿名であることを利用して悪意ある言葉を書き込むなんて卑怯だと腹が立った。しかし、その一方で、私がやったことも本質的にはこの人たちと同じなのではないかということにも気づいた。本人のいないところで悪口を言う、「ばれなければいい。」という点でこの卑怯な人たちと同じではないかと。

もし、あの日に戻れるとしたら「直接本人に言ったら？」という一言が言えるだろうか。あの日から一年。傷つけた友人と何のわだかまりもなく会話ができるようになるまでの時間は、私自身の弱い部分や課題と向き合う時間だと思っている。この後悔を二度と繰り返さないよう、自分の言葉には責任を持ち、相手の立場に立って考えられる人になりたいと強く思っている。



「隣保館報」…人権・同和問題を扱った記事を主体に年4回発行。人権・同和問題を見つめてもらうため、日常的な問題に焦点をあて市民の皆さんに理解と関心を高めってもらうための広報活動です。

